

私の幼児教育論

南信子



一 私の幼児教育論

幼児教育は幼児を対象とする教育である以上、人間の一生における、この幼児期の持つ意味を知ることが、まず最初に大切なことであるといつてもよい。そこからこの時期の教育はいかにあるべきかという問題がおこつてくるのである。だから幼児期の解釈の相違や、現実の幼児をいかなるものと見るか、その幼児観のちがいによって、その教育のあり方に大きな差異が生じてくるといってよい。またそれらの考え方によつて、幼児教育は、教育の系列に入るのか、あるいは独自な学問として樹立される理論があるのかが問題となると思う。

私は、幼児期は、人間の一生における最初の段階であり、人間の人格の中核が形成される後期であるという観点において、人間の生涯にとって最も重要な時期であると思う。しかも、やがてそれぞれの幼児が、人間として、その人格的 existence としての

あり方にめざめていくために、配慮しなければならないすべての事柄をふくんでいるのが幼児教育であると考えている。それは幼児の福祉の問題とかかわりをもつてていることは当然であり、かつまた生物学的な自然な成長発達の法則の中に生きている現実の姿を無視するものではない。

また一面、人間とはいかに生くべきものであるかという哲学の問題とも無関係ではない。さらに、人間は、くしくも神の与え給う成長の法則の中で生まれ、最も神が祝福し給う人格的存在として、神の求め給うように生きるべきものであり、そのことを可能ならしめるために、また彼ら自身がやがてそのことを自覚するように、幼児期に必要な教育的な配慮をすることが、幼児教育であると考えるのである。しかも、この時期にどんな教育を受けたかとすることが、その人の生涯に永続的に大きい影響を及ぼすことを思えば、この問題は、幼児教育の重要性を認識する上に、みのがしてはならない点である。最近幼児教育

の重要性が、教育界でも一般社会でもみとめられてきたようであるが、とかくそれが、能力の早期開発の点から論ぜられたり、早くおとなにするための準備教育のような考え方であつたりしては、大きなあやまちをおかすことにもなりかねない。人格は、人間が物事をいかに認識し、感じ、またいかに考えて行動するかを規定する個人の総体的な特性をさすものである。それは人間の認識的、感情的、意志的特性の総合されたものである。こうした人間らしい人間となるための基礎となる人格形成の問題をぬきにして、ただ知的発達のみを促進させようとしたり、芸能方面の abilities を開発することに心をうばわれたりするだけでは問題である。幼児教育のあり方について正しい認識をもつようになしたいものである。

そのために前述したように、幼児期とはいかなる時期であるのか、その発達の特質を知り、教育的な課題をしっかりと把握しなければならないと思う。紙面のゆるす範囲で、さらにそうした具体的な問題にふれてみたい。

二 幼児期の発達の特質をみつめる

人間が長い幼児期をもつてすることは意味深長である。モルモットは誕生三日で自分でどうにかやっていく。チンパンジーは九ヵ月で成熟する。牛馬は五、六歳で青年となる。人間は一

人前になるには二十年を要し、外見的にも実質的にも、おとなに依存し無力である幼少期が長いことは、神の深い摂理の中にあります。この幼児期をいかに充実させるかは、その人間の一生に大きなかかわりをもつてくることを忘れてはならない。幼児教育は、たえず現実の子どもをみつめながら、その将来を考えていなければならぬのである。特に変転きわまりなく急速に進歩する現代においては「現在は未来をふくんでいる」という言葉が実感される時代である。

① 彼らは成長しつつある

子どもの中に成長の法則はやむことなくづけられている。その身体と心は、人間の知ることのできない神祕なものに包まれて成長していくのである。多くの心理学者は、長い間このことを追求してきた。多くの幼児教育の関係者は絶えずこのことを問題とし、特に母親たちは自分の子どもの成長発達が、他の子どもたちがつて異常でないかを常に心がけている。

成長発達の神祕は漸次科学的にあきらかにされつつあるが、私共幼児教育に關係するものは、この子どもの成長発達に深い関心をもち、学者の研究にきき、子どもをしっかりとみつめ、あやまちなく成長発達を助けることができなければならない。成熟と学習の問題、それにかかわる環境や教材、玩具遊具の問題、まわりのおとなとの働きかけと、子ども自身に活動をおこさ

せる要因の問題が、多くの関係者の関心のまととなつてゐる現代の幼児教育において、成長しつつある幼児の発達の特質をしかめることは、永遠につづく課題であるが、育て給うのは神であることを信ずることは、人間があやまちをおかさないよう谦遜になるためのよい支えである。また人間の成長は草花や動物の成長と異つて、人格的な存在として成長しつつあることを、幼児教育においては特に忘れてはならないのである。

(2) 彼らは人間としての基本的欲求をもつてゐる

生まれた時から人間は基本的な欲求をもつてゐる。食事、睡眠、排せつ、保温、活動等の欲求はどちらかといえば身体的なものであり、愛情、安定感、所属感、成功感、承認の欲求等は精神的なものである。幼児期にはこれらはきわめて単純な形であらわれ素朴なものである。しかしこれらの欲求がいかに充足されるか、あるいは充足されないかは、彼らの人格形成に大きなかかわりをもつのである。愛情のない冷たい扱い方で、食事や排せつの世話をなされる時、消化不良をおこしたり、異常排便をするようになるとさえいわれ、成長発達を阻害すると同時に、その人格が円満に発達せず、情緒が不安定となつたり、反抗的な行動をおこす結果となる。こうしたことが、やがて性格の型をつくっていくといわれている。そこで、彼らの基本的欲求を常に人格的なものとして取りあげ、人間として必要な心や、

態度の成長や助けとなるよう指導しなければならない。どんな人間関係のなかで、基本的欲求がいかに扱われるか、そのことが、人格形成に及ぼす影響の大きいことを考えなければならないのである。

(3) 彼らは多くの可能性をもつてゐる

人は、人間となるために必要な多くの能力を乳幼児期から与えられているのである。たとえば感受性、直観力、想像力、表現力、思考力、自発性、探求心、創造性、社会性、宗教性等である。これらは皆人間特有の能力である。しかもこれらの芽生えは、幼児期においてすでにあらわれる所以である。これらをきずつけたり、阻害したりすることなく、彼らが人格的存在としてのあり方にめざめていくために用いられなければならない。これらは天与の能力であるからである。しかも彼らはひとりひとりによって異つており、そこに個性の相違、人格の独自性をつくり出す要因があり、世の中を変化あらしめ、相互扶助をなす動機をつくり出す原動力であるからである。私共幼児教育者は、これらのことに深い関心をもち、それぞれに与えられる賜物を十分にいかし、それらを社会のために、また自分の成長のために用いるように指導しなければならない。以上幼児期の発達の特質を三つの点から概観してきた。さらに具体的な問題に入りたい。

三 幼児教育のあり方

多くの可能性を与えた成長しつつある幼児の教育を考えるとき、それらが子どもの側にどんな形で展開されるべきであるか、私は三つの要点があると考えている。それは子どもの遊び、生活、文化的創造的活動である。場面をこの三つに展開して考えてみたい。

① 遊び

子どもの遊びは、彼らの生活そのものである。おとなはこれを利用して彼らの成長に役立てようとする。遊びに教育的価値を期待しようとするのである。しかし彼らの生活であり生命である遊びは、遊びそのもの、遊ぶことそのことが大切なのであって、あまりにも意図的に考えると、子どもはそれを感じとり、早くおとなになるために遊ばなければならないと考えはじめる。これは遊びの本質にもとるといわなければならない。彼らは遊びの中に、自分の思いをあらわし、自分の力をためし、楽しみを見いだしていることを忘れてはならない。彼らの生きがいをおとの目的のために圧力を加えてはならないのである。彼ら自身が生きるよろこびを感じ創造的に活動するところに教育的な意味があることを知らなければならぬ。発達に応じた環境を用意してやることはもちろん必要である。危険なことや反社会的行動を防ぐことはもちろん必要である。

会的行動がおこった時のために教師の監督が必要である。しかし、できるだけ自由な環境を与えるために、自由遊びを展開してやることが大切である。個々の人格を尊重し、子ども同志もまた自分の表現を十分にしながら互いに思いやりをもちつつ、そこに人格的共同体をつくり出す基礎となる態度について、互いに学ぶ機会を与えることが必要である。

② 生活指導

幼児のために人間として必要な健康生活、安全な生活を保証することはおとの責任でなければならない。彼らはその方面では全く無力なのである。食事、睡眠、排せつ、着衣、清潔に関するよい習慣をみにつけてやるために細かい配慮が必要である。さらに言葉を用いることができるようになると、まわりのおとな、子ども同志の関係が密接になり、生活の内容も豊富で複雑になってくる。子どもの言葉の発達とともに彼らの人格的発達は著しくなり、まわりにもそれが感じられる。ものごとを考えることや、人に対して用いる言葉、人間関係をつくり出す言葉、それに必要な態度を指導する絶好の機会がおとずれるわけである。さらに幼稚園や保育所に入園することによつて、集団生活という非常に困難な生活が展開されるが、彼らの社会性の発達はこの問題をも何気なくきりぬけてゆくことが多い。しかしこれを円満に行なうためには子どもなりの努力が必要である。

るから、まわりはこれをよくみとめて励ましてやらなければならない。よい指導をうけるならば、彼らは理想的な民主社会を自分たちでうちたてる方法をいつのまにか学んでいくのである。

約束やきまりを守ることの必要をみにつけ、人間関係の楽しい経験をつみかさねていくうちに、彼らは人間としての基本的な態度を自然に学ぶのである。こうしたことが重要な幼児教育の課題である。個々の彼らの生活をみつめ、この方向により指導がなされるようたえず反省が必要である。

(八) 文化的創造的活動

子どもといえども多様な文化の中で生きているのである。その文化を受容し各自がそれを受けつぐことは人間の大切な一面である。音楽、文学、美術、自然科学、社会科学等、人間をとりまく文化の伝統を語りつたることによって、彼らの情操が育てられ円満な人格が形成されていくところに多くの期待をかけなければならない。そうした文化は人間の精神の糧となる。幼い時から芸術的な香りの高い話や詩、音楽、絵画等に接し感銘をうけ感動することのできる子どもたちは幸せである。美しい自然、楽しい自然に身も心もひたりこみ生活することのできる子どもは幸せである。また多くの社会的な問題を子どもにわかるように説明してやることが大切である。彼らはこうした文化を受容することによつて、自然にその中で自分の人生観をつ

くり出し、生きがいを見いだしあるいは人として歩むべき道を発見していくのである。さらに文化をつくり出す人としてのあこがれを胸にひめ、人生を意義あらしめようとする意欲を育てていくように導かれるならば、教育の貢献は大きいといわざるをえない。幼稚園等では特にこうした文化財に心をとめ、幼い日からより眞実なものに目をむけさせるよう努力していかねばならない。また子ども自身にも文化をつくり出してゆく素地を育てることが大切である。子どもたちは自由にえがき、言葉に表現し、歌い踊ることは得意である。これらの創造的な能力を伸ばすことができる教師でなければならない。

四 家庭 幼稚園 保育所

幼児教育の場は、家庭、幼稚園、保育所であり、特殊な場合として養護施設がある。幼児教育者は常に、家庭教育の課題は何か、施設における幼児教育はどこの面を担当するのかを考えさせられているが、最近は育児の社会化という問題が世界的な問題となりつつある。この時点で、幼児教育者は、家庭、幼稚園、保育所のあり方にさらに思いを深めなければならない。私は乳幼児期にとって家庭は不可欠であると考えている。彼らの所属感を満たし正しい依存性と信頼性の上に人生の基礎をおいてやることは、彼らの人格形成に重要な出来事であり、それを

最も自然に適確に満たすのは家庭であると思う。やむを得ない場合にはそこに適切な指導がなされ、母性的な養育をする人格的な出会いを経験することのできる人がその子どものために必要である。場所よりも人である。子どもの発達に応じ、母子分離ができる時をみはからつて、幼稚園や保育所を選ぶことが大切である。私は家庭教育で果たすことのできない役割が、集団の教育の中にあると思う。すべての子どもに幼児教育の機会をとを考えるのは妥当である。それだけに幼稚園や保育所の内容を問題にしなければならない。私は幼稚園や保育所が、しっかりと人格形成の教育に対する認識をもち、幼児教育がゆがめられないよう世の親たちに対する指導的な役割を果たさなければならぬことを最近特に痛感している。最後に、幼児教育に最も大きな役割をもつ教師の問題にふれたい。

五 教師（保育者）

幼児期の教育が、人格形成の重責をになう教育であることを考える時、また人格は人格とのふれあいの中で教育の効果をあげることをあわせ考え、教師の責任の重さを思うのである。子どもが何を経験したかということも大切であるが、どんな人格と出合つたか、そこで何がめざめさせられたかが、大きな問題である。宗教的な幼稚園では、そこで子どもたちは、神と出合

うのである。人生の生きる道を漠然とかもしれないが感じさせられるのである。教師が誠実であり愛情深いことを心に感じた時に、彼らは誠実や愛情ということを身をもつて経験するのである。時には教師にしたがわないことがあるかもしないが、子どもはその教師の誠実さと愛情からは深い影響をうけており、自分の尊敬し愛する教師の命令には自然にしたがうことができる場合も多いのである。またその人の語る言葉や態度から影響をうけていくことが多い。それは同一化の心理でもある。虫のきらいな先生のクラスでは、虫を愛する子どもはあまりあらわれない。音楽のきらいな先生のクラスはその方面に積極的にならなくなる。片づけのじょうずでない先生は子どもに玩具を大切にすることを教えるのはへたであることが多い。

教師の人格が、一番問題になるのは幼児教育である。日ごとに子どもとともに成長していくことが大切である。根本的には、その教師がいかに人生を生きているかが問題となる。聖職か労働者が問われるゆえんである。さらに、人間がある完全な目的のために機能化されるためには、きびしい自己訓練が必要である。幼児のための仕事をするものは、子どもに対する深い愛情と、専門家としての強い自覚と豊かな内容が必要である。そうしたものを与えてくれる源泉をたえず求めていくことが必要である。